

ミオヤの光

聖子の巻

目次

一事を遂ぐること	一	光の反映	三〇
獨立	一五	意志の改革	三二
世界の目的	一三	不斷光と沈着心	三四
螢雪の功	一六	怯懦と眞勇	三六
熱誠	二三	不屈不撓	三八
聖子の天職	二五	光なき家	三九
眞心の満足	二七	不斷光裡の健闘	四〇
會報	一		一

一事を遂ぐること

充分に注意を以て爲したる事は後難の虞なし。(セーキスピーア)
 備はるを責むるは難しと雖も、何事も完を期すべし。完を期する人は怠慢と失望の
 餘り不可能として放棄するよりも、完全の域に近くこと數歩なり。(チエスターフェ
 ード)

早急は管に仕事を損ふのみにあらず、又生命を損ふ(ラボック)
 之を要するに何事にても自信なき人を決して信する勿れ。(スターン)
 毎日一時間にも勉強の良習慣を得て飽まで其の學ぶ所に精通せんと期する人は
 一年の末に於て其の進歩の跡に驚かん(リットン)
 天下の青年は一事を完全に爲し遂ぐれば満足安心てふ一大報酬ある事を知らざる可
 らず。事正に出でざれば實益なし。事をなして遺算なきを期するは立身の基なり。

己が行為の正不正を無視し眼中唯貨銀あるのみの人は其の貨銀の種類が金銀と官
 職と名譽との如何に關せず陋劣なり。(エマーソン)

未成の仕事は以て仕事と稱するを得ず。一種の風物なり、流産なり、兒童が熱心に
 花園を掘る、頃刻の後初の熱心消えて川に出て魚を釣る。久しからずして倦み果て船
 を造る。心機一轉し球を弄び、隨時其思ふ處に従ふて毫も遲疑せず。

或偉人曰く、我が大成せるは他なし、予は一時に唯一事を爲し而して之を爲し遂げ
 すんば止まず。

備忘録を製するに五年過ぎて讀み難き程粗略なる可らず、何事も早急の餘り散漫に
 流るべからず。吾人が目して淺薄と評する人は此方法によりて形づくらる。而して事
 を爲し遂ぐる習慣を養成するの心掛なき人には淺薄已上を期待するを得ず。

電信機發明家のモールス、初めロンドンにて繪を學び、ウエストの批評を請はんと
 て、ヘルキユレスの半身像を畫く。心血を凝ぐ事長日月、成るに及んで心効かに以爲
 らく會心の作なりと。ウエスト一通り之を檢したる後徐に之を返却し「上出来也、
 君宜しく尚進んで之を完成せよ」と。言意表に出でしかば青年畫家愕然として「是完
 成せるものなり」と云へり。ウエスト其の缺點を指摘するに及んでモールス初めて悟
 る處あり。筆を加ふる事一周更に示す。激賞措かざりしが前と同一の要求を陳べて之
 を突返す。モールス案に相違し「未だ充分ならざる乎」と嘆息す。モールス家に歸り
 存分に筆を加へ數日を経て師に示す。師の態度は依然として舊の如し。モールス悄然
 として曰く「休なん、最早予の力の及ぶ所に非ず」。ウエスト破顔一番、初めて眞意を
 吐露して曰く「予は充分長く足下を試みたり。足下之が爲に益せる所常に二倍の時間
 を費して十二枚の半成畫を稽古せるに勝れり。冀くは足下一枚の畫を完成すべし。足
 下初めて畫工たるを得ん。

自然界に放てる一枚の木葉と雖も完全ならざるはなし。葉脈莖縁の微に至るまで精
 確完全を極めて餘す所なし。人跡絶えたる幽深に世を忍び顔なる草花も其の形狀輪廓

色及び美悉く備はりて女王の御苑に移し植えて御覽に供するも恥しからず、「始末をつける」とは青年が三拜すべき格言也。「爲さんと決したることは相違なく爲せ」とはロスタキエルの格言。

シカゴ大學のヤーク望遠鏡の四十吋眼鏡世界第一の高價は、クラーク氏の創造。チャールズ第一世の大宰相ストラップフォード「完全」の一語を座右の銘とす。

ジョンソンは「乃公一たび事を決せば乃公は仕立屋の針の如く貫き通らざるば已ます」。

靴工となるは恥辱にあらず然れども粗末なる靴を製するは恥辱なり。

昔一人の守銭奴巨萬の寶を蓄積し地中に埋む、目標として其の上に圓石を据ゑしが二人の鍛冶屋に發見せらる、二人互に其所有を争ひ遂に鐵槌を製す。一人は慾に目眩み龜製せし爲損じて用をなさず、入念に作るもの鐵槌を以て敵の不在に其の寶を掘つて家に劫行きたり。

獨立

内部よりの助力は其人を強くすれども外界よりの助力は其の人を弱くす。汝等をして水泳術に達せしむるものはコルク板や救命器の使用にあらずして勇躍して水中に入り太き筋肉を以て水を打つことなり。

自ら斷せずして他に謀る人は遂に道德的懦弱者及び智力的侏儒と爲る。斯る輩は内に「我」を有せず我を信仰せずして他人の門牆に走り叩頭平身して彼等の「我」を賞與せんことを嘆願す。

競争に勝つものは堅忍努力刻苦勵精斷乎たる決行不變の目的等は成功の要素なり。自暴自棄する勿れ。唐辛子の種子は唐辛子となり、林檎の種子は林檎となり、個々の人は個々の種にして其の本分は日光に浴し雨露に潤ひ以て其の發芽力を擴充して葉となり纖維と爲り花と爲り實と爲るなり。種子の種類は毫も顧みることなく其の可能

性を發展すべきのみ。

由來學校及教師の不足も書籍の缺乏も不健康も體も盲も寒さも懸念も氣骨ある士の自修獨學を妨ぐる事能はざりき。

智識を得んと欲せば自ら骨折らざるべからず。食を得んと欲せば自ら勞せざるべからず。快樂を得んと欲せば爲に働かざるべからず。勞苦は原則なり。苦は樂の種也。吾人の有せざるものために努力する間に各人の長所は發展し吾人の大事業は成就す

ワイズ氏曰く「智は人間の誇なり修養を積める才能ほど生産的なるものなく、財産門閥官職等は其の所有者に表面の敬意を表せしむるも衷心より敬意を拂はしむる事なし。又拂はしむる能はず、人をして真率なる敬意を表はしむるものは偉大にして高尚なる靈を有せる人即ち學識と徳性とを具備せる人に限る」。

希望目的學徳の鮮なりし優秀の青年が多く豫期に反して志を得ざるは抑も何が故ぞや。曰く、大成功の代價たる修養の苦を避くるが爲なり。如何なる天才も勉強努力にあらざれば其の才を用ふる事能はず。

自修てふ眼に見えざる泉は總ての偉大なる成功の源也。或人曰く「最も微賤なる男女と雖も天晴見事なる生活を爲し能ふ」と。宇宙は吾人が吾人の仕事を完成するにあらざれば真に完全なるものにあらず。

亞丁の建築家は冥々の神ミネルバの照鑑ありとて、其の圓柱の上部と下部とに於て技を二にせざりき。

ジョン・オビーの未亡人アメリカ曰く「夫と連添ふこと九年の間未だ一度も彼が作品に満足せる様子を見たることなし。逆も一生畫家には成れずと嘆ずること度々なり」と。オビーの名が赫々として天日の如くなりし所以は這般の高尙なる失望なり。

佛國の小説家バルザックは一頁の原稿に一週間を費す事稀ならざりき。プフオンの「自然の研究」は五十年間刻苦の稿を改むること十八回。ミレーは農夫の子「アンゼラス」は十二萬五千弗の價格。

ホストン市の大理石天に響ゆる一大壯觀、幾何もあらずして俄然崩壊したり、其の破壊の原因は地窖の下に數呎の古壁あり、數弗の費用を惜みたるの餘こゝに至れり。

學生の成功の秘訣は第一忍耐第二復習の不断的習慣也。

自然は一輪の薔薇一輪の果實を作り其の完成を期するに數世紀を用ゆ。

完全とは精密の意を含蓄す。確實ならざる人、臆斷する人、想像する人、推量する人、假定する人等は信用し難し。

完全を期せよ。何事に着手するも必ず其の始と終と内側と外側と原因と結果及び頂上と底とを知らざる可らず。

汝の適處を擇ぶに注意せよ、然れども一度手を下せば一事を仕遂げ、斃れて後止め。

時間は人生最貴重物、古人曰く時は金也、否金錢よりも貴重、蓋し數百萬圓を以てするも尙一瞬を買ふこと能はざればなり。

必要な物を完成すと不要の末事に元々たると其の間距る事三千里、末事に拘泥して無益に細微の區別をなすの習慣は仕事の怠慢粗略と毫も擇ぶことなし。

成功家某曰く「苟も一旦爲さんと志せし限り予は如何なるものと雖も必ず満腔の熱心を以て之に當れり。一度事に當る限りは一心不亂、一寸の隙もなし。大事にも小事にも予は常に熱心を以て當りぬ」。

獨立 獨行

自恃と克己心とは我水を飲み我パンを食ひ以て獨立の生計を營む爲に眞面目に學び又は働き且つ實力を以て得たるもの、中より若干を貯蓄して未來に備ふる事を人に教ゆるものなり。(ペーコン)

何人も自恃心を失ふ可らず自恃心は眞丈夫の主なる要素なり(コッスト)

苦痛ある人に對して吾人の採るべき最良救護策は其の苦痛を除くにあらずして其の苦痛に耐へ得る元氣を鼓舞するにあり。(ブルックス)

若し夫れ強壯なる少年自宅にある時手を懐にして安逸を貪り、母或は姉妹に厄介を及ぼさば天下豈之を惡とざらんや。

ビスマーク一友と共に山野に狩す。歸路淺き川を渉る。ビスマークは巧みに石を踏みて渡りしが友人過つて水中に落つ。砂の中に足を没し周章狼狽を極む。果は聲を放つて泣き、雙手を上げて救を求む。醜態實に見るに忍びず。ビスマークの救助策は極めて奇抜なり。乃ち肩にせる小銃を取直し彈丸を込め引金に指頭をかけ、狙を定めて將に火蓋を切らんとす。其の形相物凄き事言ふばかりなし。是に於て憐れむべき水中の人は怒と恐とを以て渾身の勇を奮ひ一躍して岸頭に上りぬ。ビスマーク乃ち銃として銃を取直し初めて意中を吐露して曰く、是全く君をして必死の勇を鼓し以て自ら危難を脱せしめんが爲のみ。請ふ予の無禮を答むるなかれと。

或人畫工オビーに問ふて曰く「君の門弟に畫事を教授する方針如何」答へて曰く「君が小狗に水泳を教ふる如く、死地に陥り然る後生るを以て主義とす」。

ジョン・パンヤンは空前の寓意小説を開々たる獄裡に呻吟中に作れり。彼は獄中の寸陰も徒費せざりき。彼はバイブルとフォックスの二巻を手にして凄愴の氣に満ちたる獄裡に呻吟中に名著大略歷程を作りぬ。彼は徒らに坐し我運命を悲み天命を怨み迫害者を呪詛する如き無氣力漢にあらず。獄屋は彼の爲に最も有益なる適處に投せられたるものと云ふべし。彼は圖書館の便なく他人の助力を待たず、必要に迫られて獨立自助の精神を喚發したる也。彼はバイブルを精讀し其深みある描寫より曾て夢想だに無き重寶を發見したり。其富や絶大其美や絶倫也、彼の眼に映する牢獄は金殿玉樓と異なる所なし。彼が自己胸中一大寶庫の存せるを悟りぬ。

世界が眞に尊敬を拂ふものは各種の困難障礙を排除し以て己が才器の短なる所を補ふ處の勉強努力なり換言すれば沮喪せざる精力なり。

グレーズ、ダーリングは孤島にありて老年の父母と歳月を送れる少女にて、功名の機會も無し。然るに名譽と財産とを目的として都の空に志したる彼女の兄弟姉妹は

香として聞えざるに彼女は女王よりも有名となれり。グレースは倫敦に行きて貴族を見るの必要なかりき。貴族等却つて千里を遠しとせずして孤島に彼女を訪ひたり。少女は坐ながらに王侯の羨む名聲を博しぬ。

グラントの同窓生の一人憮然として曰く「髻髪のグラントに今日の成功を期待したるものあらんや。彼は學力中等にして學科を怠りナポレオン傳を讀むに教師は怒りて之を没收し火中に投せり。風采の平凡なるグラント、家庭に於ける少年グラント、大膽不敵、物覺えの悪きこと及び剛情以外何等の特色あらざりき。

現今サンスクリット及びゼンド語學者の泰斗と仰がるる米人は學校の出身者にあらずして市街鐵道の車掌として毎日十七時づゝ労働せる時に於て語學研究の端を開けりダニエル、ツエプスター嘗て其の曾孫に寄せて曰く「貴殿は自力に待たざれば學ぶ所之なかるべく渾身の力を以て研鑽するに非ざれば世界中の教師に教を仰ぐも學者たること難し」と。

大事業を成すものは必ず天稟の勇氣及び器量絶倫なる人にあらずして異常の勤勉と最も能く意を用ひて訓練せる熱練とを以て其の能力を行使する人也、而して這般の熱練は刻苦勵精及び經驗に待たざる可らず。

世界の目的

此黄金佛には二の不思議あり到る處に崇拜せられて一利なき其の一なり。有ゆる階級の人に崇拜せられて一偽善者なき其の二なり。(コルトン)

金錢を蛇蝎の如く憎む人は悉く信する勿れ、蓋し失望の餘是を賤しむものなればなり。(ペーコン)

貧に迫りて始めて金錢の有難味生ず。

金錢方便及び満足に乏しき人は三良友なきものと謂ふべし。(セーキスピーア)

富める心なき富者は一個の醜き乞食也。(エマーソン)

已を得ざる場合即ち恥辱と二者其の一を擇ばざるべからざる場合にあらざれば貧は何人も好まざる條件なり。此世間一般の尊信せる金錢に反抗して如何に絶叫するもの反響あらんや。

所詮金錢は俗世の神經を過敏ならしむる刺戟物也、金錢の欲は人事を維持するに足る一勢力也、道德的引力の一大原則なり。

兎に角貧は諸道の妨也、青年讀者若し四百四病よりも貧のつらきものなる事を知らば吾人の幸福何物か之に如かんや。

自然は其の人類不滅の大目的を擁護の爲又一步誤れば社會に毒を流すの虞ある金錢權力及び成功の欲を以て始めて文明開化を可能ならしむる事を得べし。間斷なき人類進化の裏面には自我的本能性を満足せしめんとする普遍的欲望あり。個々が其の欲望を遂げしめんが爲めに互に相争ひつゝあるは、即ち自然が漁夫の利とする處にして自然は之を化して人類の恩恵とす。隣人の右に出んとて鎗を削つて輪贏を争ふ人は各社會に絶大なる貢獻を與ふるもの也。權力名聲及び金力に伴ふ利便に對する這般の猛烈なる欲望を外にして自然は焉ぞ人間の最高類型を改善し得んや。這般の限なき熱望あらずんば勤勉忍耐機智聰明及び節儉の與ふる教化は那邊に求めんや、又勇氣自己犠牲及び進取の動機那邊より來らんや。此三者あざれば偉人は不可能なり。

世評に拘泥せずして能く自己の仕事尊重する人は他日必ず頭角を表はすべし。労働の最良なる産物は仕事に熱心にして心の高尚なる労働者なり。グラッドストンの至誠と熱心とは始終其の政友を鼓舞したり。ブルツクスの勢力強烈なる赫として天日の頭上に中せるが如く群小仰ぎ瞻て以て怪となす。其の是あるは熱心の絶倫なるが故なり。

實務と云ひ文學と言ひ美術と云ひ凡そ事の如何を問はず一たび志を立つれば必ず愛を以て爲さざるべからず。(メルモース)

熱心は人の誠を證明する鐵案也。言語の如き金錢の如き其他のものはすべて之を興

ふる事比較的容易也と雖も、人が其生命を投出す時は其の事の如何に拘はらず満腔是至誠也と知るべし。

ハックスレー曰く、古來學術上の大事業にして熱心を缺きたる人に依りて成されたものなし。才幹の如きは與らざる處也。と。

ホワイトエールト君に接して如何なる感あるや、造船家答ふらく「予日曜寺院に至る毎に予は説教に耳を傾けながら尙一般の建築全部を竣成するに足る。然れどもホワイトエールト君の面前に於て少しく心を餘所にせば一枚の板をも打ち附くること能はざるべし。

螢雪の功

著者の名を千載不朽に傳ふる學術上の書も、文學の一篇も美術上の各流派の作品も一として多年苦心經營の餘に成りたるものならざるはなし。

廣西のチイン獄吏の爲に誤られて獄に投せらる。チイン戒めて曰く「爾來輕卒に事を斷する勿れ。又貧富の別に依りて待遇を二にする勿れ。天下是より誤まれるはなし。驕る者遂に久しからず、冤に居る者の涙は天に凝りて適切なる應報が苦しむる者の頭上に落せすんば止まず。而して天は不正なる者の願を容るることなし。

ユーゴー曰く「生きる人は努力する人なり。精神にも眼中にも大決心の充溢せる人なり。天の使命に感奮して技を上る人なり」。

チャーと稱する旨、豊の少女ハーバート大學の入学試験に通過する程の學力を備へ居りたり。

フアグソンは幼時に教育を受けたる事なし。父及び兄の談話に耳を聳てつゝ智識の門に入れりと。日記に曰く予は父に教を請ふを屑しとせず。父と兄とが海外に滞在し中常に公會問答を讀み、父の兄に教へつゝある、學科を自修せり。而して了解に苦む點は近隣の老嫗に質したり。故に予は父の教を待たずして得る處多し。

フアグソンは天文學者の高名なる人、水呑百姓の子。

アースキンは空前の大辯護士、彼は初歩の訓練と古典的教養によりて世に乗せり。モザル、六歳にて琴曲を作れり。

リー博士、天性魯鈍、希臘語拉丁語伯來語カルデー及びミリア語に通じ、遂に一世の碩學大言語學者。

ローエル水車場の工女等は簡易なる生活と高尚なる思索の龜鑑を天下に示せり、工女の一人はワッツの著「精神の改良」を仕事服の衣囊中に入れ他の工女をば日出より七時半に至る勞働時外に夜間獨逸語を學びしが遂に改良會なる團體を組織し一二の雜誌を刊行し彼等は頗る精神的に高尚にして雅醇、賤業を恥とせず、彼等の家庭は彼等の勤儉の美風に化せられて常に平和と正直との氣に満ちたり。此等の工女は大に其の希望を遂げ或は教師となり或は文章家となり或は美術家となり或は富豪の家に嫁せり

ルシー・ラルコム嬢は如何なる女子も必ず一讀せざるべからざる「新英國女子」の著者也。嬢は十三四歳の頃ローウエルの紡績場の工女たりしが場主の許可を得て清きメリマックの河に臨める窓に修理を加へ新聞紙の切抜を以て四方を貼りつめ詩歌の小圖書館とせり。業を妨げずして之を耽讀暗誦したり。

ドクトル、クラークは赤貧裸足の愛蘭兒なり。書を購ふの力なく日々數里の所の某氏の藏書を借覽したり。

マルチノーは貧少女、常に一卷の書を懷にし枕頭にも一卷を備へ食事にも一卷を膝の上にし、踏臺を椅子として爐火を燈火としたり。

ガフキールドは學資を得んが爲に木挽となり。ヒラム大學に講義を傍聽せん爲に大學の鐘撞掃除人足長となりたり。

獨學自成の大家人名。ベンジャミン。フランクリン。ワシントン。ワット。

スチブンソン。セーキスピア。バイロン。ホイットチア。ガリバルデー。

リンコロン。 グリーン。 チッケンス。 エヂソン。
 大學出身者。 テニソン。 ローエル。 ホームス。 エマーソン。 ウエブスター。
 チャール。 ビスマーク。 ダーウイン。 トーマス。 フレーベル。 ハミルトン。
 ニュートン。

ワットは蒸氣機關の發明家、曰く「予は他事を顧みる能はず唯予の一家をして餓死せしむるに忍びず」と。

一家の爲にも國民の爲にも滿腔の熱心を以てせざるべからず。

ワナー曰く「予の片言隻句にして青年學生の熱心を冷却せしむるものあらば（懷疑主義にて）予の罪や大也。彼は最高のものを撰べるなり。其の美しき信仰と其の熱望とは人生の光明、學問藝術教育に對する熱心と献身となかりせば世界は混沌として凄愴の氣に滿たん。

オルレアンの少女が佛國救護の神話を確信し神旗と神劍とを手にして起つや、佛國王も老巧なる大將軍も如何ともする能はざる佛國の士氣を振ひ磅礴たる熱心全軍を一貫し躍然として生動せり。其の熱心の前に當るものなく英軍其名を聞いて震駭せり。優柔にして親ら三軍を統ぶる勇なく、蒙塵して日夜徒らに宸襟を惱したるチャールス七世もジャンダークの健氣なる振舞に鼓舞せられてライムに出陣するの大膽を敢てするに至り。ジャンダーク乃ち王に謁して我力あらん限りは誓つて此賊を掃蕩し國家を泰山の安きに居くべしと伏奏す。果して然り。

各種の發明繪畫彫刻の逸品傑作詩歌論文小説等すべて熱心の生む處。熱心は一種の精神的權能也。高級權能の一なり。常に五官の頤使に唯々たるものは吾人眞の熱心なるもの見るなし、熱心の本體は向上的なり。

熱心に遠慮を要せず、何の憚るべきことやある。世人が公等を見し熱心家と呼ぶの語氣に冷笑の調を帯ぶるも妨なし。或一事の爲すべき價値ありと信せば即ち世評の如

何に頓着なく滿腔の熱心を傾けて之に當るべし。最後に笑ふものは最も善く笑ふものなり。最も多く成功するものは薄志弱行の徒にあらず。

熱心は情意を強固ならしめ思想を生動せしめ可能的を現實的ならしむ。

熱したる鐵は鈍なりと雖も板上に孔を穿つことは銳利にして冷めたる鐵を以てするよりも深し。

サルベユー曰く「最良の手段は熱心によりて得らる。自ら語る所を自ら感ずる程の自信を以て聴者の心を動さば聴者は多くの缺點を看過すべし。特に學問を以て然りとす。刻苦勉勵に待つにあらざれば世界の有ゆる天才を網羅すとも何らの裨益を公等に與ふる可らざるべし。予は一章を學ぶに數年を費したりと。

或る僧正或時名優ガリツクに告て曰く「ガリツク君よ足下技を演ずれば看客皆其の演劇なるを忘る。然るに予は眞理を眞理として人を信せしむる能はざるは何ぞや」。彼答へて曰く「恐らく足下自ら信せずして眞理を教ふるならん。予の技を演ずるや常に眞ならざるものを自ら眞なりと信す」と。

熱 誠

此世界は熱心家の爲に提供せられたる懸賞品也。(ロバートソン)

世界史上に赫々たる大活動は總て熱心の功也。熱心なければ大事業遂げがたし。(エマーソン)

成功は才能よりも熱心に因ること多きは經驗の明示する所なり。勝利者とは其の志す所に自己の心身を捧ぐる底の人なり。(バックストン)

熱心なる人は手段を見ず。若し発見すること能はずば即ち之を創始す。(チャナンング)

心にもなき言語を弄して人心を動かし又は人心を收攬せんと望む勿れ。(ゲーテ)

て無益なるよ。才能あり教育あり學識ありとも熱心なくんば事物の眞髓に透徹せず隔靴搔痒の感あり(クラーク)

君が意氣も又衰へたる哉、君然らずと言はゞ君の事業に適するやを省みよ、斃れて後已ひの熱心に代る可きものなし。(ヂッケンス)

「人熱せざれば無なり」とはモンテーンの唱道なり。戀の力が青年の眼に醜婦も天女の如く映せしむる如く、熱心は乾燥無味なる職業に一種の新らしき意味を添ふるものなり。戀の虜と爲れる男の感覺は鋭敏に觀察力は燃犀にして戀の目的物に於て他人の見る能はざる無数の徳と美とを見る如く滿腔の熱心熱する時は人は知覺力及び視覺力増進する事著し、故に他人の知らざる美と趣味とを勞苦缺乏辛苦の中にすぐ發見するものなり。

古來大革新大發見大發明大成業と曰ひ社會の趨勢を動かし一新生面を開きたるもの熱心の効果にあらざるなし。熱心とは高遠なる目的に對する熱烈なる確信なり。或種の高尚なる事件に對する忘我的献身なり。一大目的を果さん爲の精神の凝聚なり。精神及智力的大活動の憧憬ある献身的努力なり。個人と國民との別なく斃れて後止の根を以て堅忍持久する生命なり氣力なり。

聖ポーロがアクトツバ王を説くや、王は陽に大喝一聲彼を退けしも陰に愾然として我殆んどクリスチャンたらんとしたりと自白せり。王はポーロの熱心に動かされたるなり。

パリツシンの白色燒物の藥の發明、コロンブスの新世界發見、彼は獄窓に呻吟し死に至るまで貧窮と侮辱との爲に苦めり。ハーヴェは血液の循環を唱道せし熱心家、ガリレオは天文學の熱心家なり。

聖子の天職を果す

如來の靈光を被り更生したる我は即ち聖子なり。聖子の天職聖子の責任を果さざる

べからず。如來は正義なり。吾人は聖子の義務を果し責任を盡すてよ自信力は吾人をして人間已上の勇氣は物々として起さざるを得ず。

如來の光榮を顯すは信者の義務なり。如來の正義を擔ふ處の信仰には水火をも敢て辭せざるの勇氣は發するものなり。若し此の義務を果すべきを怠る時は却て其罪を宗教に及ぼし恥辱を會友に被らしむ。果斷の勇氣なければ怯懦の誇りは死る可からず。己を尅る勇氣なければ先づ自己の良心の呵責を受け亦他人の爲に排斥嫌忌せらる。

懶惰の爲に終身貴重時間を浪費し茫茫として路塵に汚され意は徒らに世の爲に翻弄せられ斯く茫茫の裡に日を辛へ年を積みたるもの、而して後に斯正義の光明の覺醒したる時は此浪費したる時間と精神の爲に悔ゆるならん。

又世に處して自己の天職を果し義務を盡さざる輩は光明常に照せる世界に此の如き人物を容るべき餘地やある、此漢を活すべき處やある。活眼開け來りて斯世界を觀する時は方便土とて光明中に聖子の天職を果すべき菩薩修行の階級たる土なり。現世界は即道徳的意志を鍛鍊すべき國土なりとす。若し此の方便土に生存して其の掟たる六度萬行を以て自己を鍛鍊し本務を果し聖者の資格を養ふにあらざれば人生將た何の功かあらん。現世界は肉の幸福と僥倖の爲に其生を送る漢は方便の學校にて選擇の檢定に落第したるものなり。

正義の光によりて人生の眞理即自己本來の目的あることを自覺し來らば何なる艱難困苦も己を鍛鍊するの機とし歡迎す。自己の盡すべき本務を免れ當然の責任を避くるを却つて自得とし幸なりとし歡ぶ如きは肉の儉安を買ひ光榮を顯すべき本務を怠り、如來の唯一の賜たる光の時間を唯形の儉安を貪る爲に浪費する如きは如來の正義に背き我欲に欺かれて世の爲に貢獻するなく、放逸私有の爲に日暮を爲す如きは此の貴重なる恩賜をあたにす。自ら罪なしと斷するや。

眞心の満足

若し人未だ此の光明の眞義を識らず、闇の中に身の儉安を希望し肉の幸福を追求して若し彼にして僥倖にも自己の求むる處、悉く捉獲たりとせんか、或は闇の中に自ら暫く満足に感ぜられん、而して此貴ぶべき時間を唐らに放逸遊蕩の中に葬り已らんか、彼未だ肉の煩惱の毒に昏醉せるほどは得意たるも、若し一旦正義の光明が醒め來る時は、はいかに彼は苦しまん。浪費したる我生命をいかに悔しからん。願くば一たび壯年に復りて正義に己を匡正せんものと。夫と反對に正義にして自己の天職を果すほど自己を満足せしむるなし。自己の責任をつくすが如き歡喜は無かるべし。殊に此の光によりて人生の目的を解するものに於ては殊に然り。如來の正義の大氣中に生息せる自我なれば自我が自我の爲めに盡す處の行爲は正義なり。又正義は公平正大にして彼我なく自己の區別なく自己に善なるものは他人にも又善、己に受けて不満の事實は他人も亦不満なり。然るに正義は公明正大自他をへだてず。如來の我を我とするが故なり。

公明正大平等の幸福は自我の満足なり。

正義の行爲は明るれば益々満足なり。不正なる行爲は夜明くるに隨て快樂を失ふ人生眞實の満足と快樂は正義の行により自己の天職を果し本務を遂ぐる處に於てあり。勢至菩薩の大勢力は正義の觀念によりてなり。

人は勇氣充實するの原動力無ければ正義を實行すること能はず。又正義は勇氣を増進す。不正義の行爲は斯光に遇ふ時は忽ちに意氣喪失し如何に口實を設け表面を装ふとも自らの良心は疚し。

夫と反對に正義ほど人の勇氣を發揮するものなく、本務を果す爲には火水をも履むことを厭はず。

全く斯光が生命と化す時は百難を受くるも其の中に満足あり、いかなる苦境にも歡喜充滿せり。

聖源空は七十餘の高齡にて四國土佐の邊鄙の土地に遠流せらるゝも少しも憂色なく

曰く我年來都會の教化已でに年久し。邊土の士民に此念佛を勧めんことの希望年久し、年來の志願を果なんことは朝恩なりと。

光の反映

如來の心光を信じ彼心光より人心に發動する勇氣は世俗の名譽利養の爲に傾動せられず、生命困苦の爲に恐怖せず、眞聖なる如來の前に疚しからず何に世人の爲に誘はるゝも敢て意に介せず、世俗は世俗とし、情操名利等の爲に束縛せられず。

如來の光は實行する人の身に由つて實現す。其の三業に活動する一々光の實現ならざるなしと云ふ如きに至つては、其先づ接近せる人々を感化せしめ、而して普く人の模範となり、此に如來の威神光明が人の身に現はるる處一種言ふべからざるの威信あり自ら其威光に服從せしむ。

晋の遠法師の如き常に念佛三昧に入つて心々如來を離れず。時に大守、遠師に講ずるに及びその威嚴自ら感服す。又唐の導師、京師に在つて専ら念佛を勸む。教化に預るもの數ふべからず。一在家の信者清淨潔齋して食肉を斷するもの甚だ多し。一の暴悪なる屠兒ありて導師は是賣肉の業を碍ぐと云ひて刀を以て導師を截らんと欲す。時に導師從容自若として指を指して西方に示す。時に佛身光明赫々として屠兒の身を照す。時に屠兒其の靈威を感じて竟に念佛に歸す。又導師の教化の盛なる金剛法師なるものありて之を嫉視し一の堂中に在て議論を試む。問答數番、時に導師高聲に叫びて曰く、若し導が説く所の法門に於て諸佛の眞慮に稱はゞ堂内の聖像悉く靈光を放ちたまへと。聲に應じて忽ちに堂内の佛菩薩の聖像が一時に光を放つと。靈的勇氣の熾なる知るべきのみ。

眞に光明を得たる人の前には高位貴權もなく、唯眞理の光あるのみ。不羈獨立。或る一老婆あり。信仰深し。神はすべての病氣を癒す不測の力を自己に與へられたりと信仰力は世俗の警官俗吏の爲に數十度獄に投せらるゝも何なる罰も毫も怖れず自若

とし其罰を甘んじたり。若しかよわき一婦女に斯の如き勇氣を與ふるものは信力より生ずればなり。

意志の改革

若し人其の天稟柔弱の質にして貴人に對しては言語をさへ滯滞して畏縮して冷汗を流す如き怯懦夫と雖も、自ら此の勇氣缺乏の不徳なるを感じ至誠心に如來を信念して一に靈力の加はらんことを祈りて至心不斷なる時は勇氣勃々として昂り、尙湧然たる勇氣を以て一心を訓練する時は竟には意志金剛の如くに何なる貴人の前にも恐るゝなく亦百難の眼前に迫り來るにも泰然自若として驚動せざる、而して自己の進むべきに進み退くべきには退き、正義の光によりて進退其秩序を失はず、唯感情の爲に制せられて常を失ふ如き失態を演ずるなし。

眞の勇氣は管に外部の刺戟に驚動せざるのみならず、内自己の弱點たる私慾の爲に動かさるゝ事なし。

眞の勇氣の根本は斯意志を照す不斷光の缺くる爲なり。譬へば人日中外出は怖るゝなきも、闇夜の行路は何となく怖畏の念を生ずる如く、すべて經驗なき時は將に成らんとすることも經驗なき時は其の事に於て聞きが故に恐怖心生ず。例へば軍人の敵に對するに向ふ先は聞きが故に怖を生じ、又未熟の辯士が初めて壇壇上に入るや自ら聞きが故に怖ぢて言舌を滯滞する如き、是自己の意志の進まんと欲する處に一縷の光明なきが故なり。

退いて自己の私慾即ち煩惱に打ち克つを得る勇氣、煩惱の己に克つ事能はざるは己を照す光缺乏する故なり。若し自己返照の靈力不斷に照臨する時は私慾煩惱自から滅せん。意志の光なき勇、即ち無鐵砲の暴虎馮河の振舞は燈勇、朦朧衝突の勇は闇の勇なり。かゝる勇氣にして自を過り他を誤らしめざるあらば僥倖のみ。恚る燈勇は一たび光明に接し自己の野蠻なることを自覺する時は其勇氣は自ら消滅せん。されば眞の

勇氣は此光明によりて發揮せらるるものとす。あゝ不斷光は人を勇ならしむ。教祖及び諸聖者が道徳上の勇に終局まで健闘して大聖の光なる月桂冠を輝かして光明裡に凱旋の旗を翻して千古赫々たるは此光の勇者なればなり。

人間實力の確信と成功の期待と功名心と胸中の成算と運命の信仰とは勇氣を振作し鼓舞する要素也。若し此等の要素が隊伍を整へて之を率ゆる熱心を以てせば、吾人の眼前咫尺の間に翼を張れる恐怖は忽ち其影を没せん。

不斷光と沈着心

不斷光は人の意志に光と熱とを加へて常恒に秩序正しく活動せしむと云はゞ、人或は謂はん、不斷光の活動は熱誠滿腔烈火の如くなるのみと、そは不斷光の一面を文字の上に解したるのみ。烈火の如き感情の熱は正義に向つて奮起せざるなし。然れどもそは一面にして斯光が人の心靈に在りて烈火の如く熱誠の燃ゆるありて不斷の活動の動機とならざるなし。他の方には不斷は沈着にして、平和靜温の態度を持して、常恒不斷に人の意志の奥室に靈光照せば、八風の爲に煽動せられざる心燈は平和なり靜穩なり、沈着なり。斯光が心の奥室に消えざるあらば不意に危急存亡の大事に遇ふとも過を生ずることなし。自己の進退舉動誤ることなく行くべき方に行き爲すべき事を爲し、事無謀に出づることなく、心亂れず亦風前の燈の如くならず、操縱其の宜しきを得べし。

斯の靜穩沈着は殊に壯年の容易ならざる處、孔子が壯者之を戒むるに闢にありと。壯者は沈着心に缺くればなり。孤燈沈々不斷に絶ゆるあらば一少事にも忽ちに狼狽し匆忙浮沈常なく喜怒哀樂常に八風の爲に動搖せらる。

怯懦と眞勇

精神に不斷光なく聊かの難に對しても之を反撥するの勇氣なく、意氣屈伏し奴隸の

如くに己を重んずるの勇氣なく、斯かる意氣の柔弱怯懦なるものは徳行自重心もなく正義の觀念もなし。

柔軟怯懦の輩あり恩もなき義もなき人に對して其の身を屈從すること猶し奴隸の如し彼全く其徳行の何たるを知らず。自重心てふ事を意識せず。唯權威ある身分ある人の前には舌滯滞して全く言ふ事能はず。斯る柔弱怯懦の輩も一心勇猛に念佛して發得する時は勇氣漲々として湧き意志金剛の如く、如何なる境遇に臨みても怖るゝことなく、或は狂狷者ありて白刃を以て向ふにも彼は自若從容として稱名すること常の如し。表温容を以て内勇氣沈着なる彼には狷者も刃を捨て、自己の過てるを謝す。

是不斷光の眞勇は意志金剛の如くになれば鐵の白刃恐るゝに足らざるなり。義を重んずること金の如く身を鴻毛の如くす。此眞勇あるものは精神に不斷光を得たるもの、能くする處、如何となれば縱令此肉體は切斷せらるゝとも大我の中の心靈は截つこと能はざる事を自得すればなり。

山中鹿之助は鎗の名人なり。氏曰く一番鎗を使うの秘術は何の我こそと云ふ我慢にてはなし。亦南無八幡宮との神號には未だ我命惜しきが故に此身を助けとの弱みあり刀も切る事能はざる唯一心のみとなりて此身あるを忘れ、ナムアマダ佛と云ふ一心のみありて一番鎗をつくことを得べしと。光明名號の一心は不斷、即ち斷つこと能はず切つて切らるべき身は切らば切れよ、射ば射よ。又も斷つこと能はず火も焼くこと能はざる此心靈の生命は不斷光なりてふ金剛の一心は是眞の勇なり。此眞勇の不斷光は平生競争場裏に於ても最も不斷に應用すべきことなり。眞の光明的の勇なきものは酒色の奴隸となり金錢の奴隸名譽の奴隸となりて遂に闇黒的に埋没するものは哀むべし。

不屈不撓

宗教によりて身心を訓練し品性を高からしむる一大原因は光明の人となるによる。

正義に我如來の正義なる聖旨を實現するに外ならず。空き信仰を得る時は若し我身に於て正義を缺く時は如來の徳を汚す事を恐るればなり。如來の正義は自己の正命なり。或る難に遭遇して忽ちに意志を挫かれ、又は他人の爲に意志を左右せられ感情の爲に志操を變ずる如きは唯人間の意志にして宗教の神の正義の此の身に行ふべきなればなり。若し此身心は如來の正義を承たる我なるを自信する時は勇敢にして正義を堅く保持して己の本志を飽くまで決行して心靈の命するまゝに果斷決行して毫も憚ることなきに至る。又儒者は一方の外界の境遇に抵抗するの勇なきと他の一面には自己の弱點偷安逸樂肉の幸福を追求するに汲々たるものには正義の光明は影だにもなく、不斷々の勇氣を奮起し萬難に當るべき果斷の決心なく、神に背き人の前には却つて口實を設け遁辭を作り自己の遊惰を覆ひ隠し爲めに自信の正義の斯身に伏在する本性を發揮する事能はず、終身偷安の奴隸とし逸樂の餓鬼と化して身を沈む。

若し之に反し如來の神聖なる命令は不斷に我心靈に承はり正義の我なるを自信する前には徒らに世間體を作り口實を設けて怯懦我を贅くる如き愚を演せず。正々堂堂、正義の幟を立て、如來光の前には我なし人にしてふ精神には懺悔を裝ふの偽面を要せず。内良心の呵責なく内心に正義の光赫々たる所には後悔煩悶の情なく亦狼狽して爲す處を失ふ如き闇濶たる光景見るなし、

光なき家

赫々たる不斷の光なき人には眞の勇氣なく神なく唯人の前に對する口實を設けて自己の隣人に對する面談を爲すすら通れんとす。斯る遁辭口實は神の光なき處にのみ行はるべし。是自ら神の令なる良心に反し自己の勇氣を喪失せしめ、遂には病的の致命傷に陥り自ら進むべきにも道を失ひ、不斷の活氣は失はれ前途闇濶として、口實遁辭の惡習慣にして熟致せられんか、意志活氣を失ひ勇氣を失ふのみならず、人の信用を失ひ交誼を害き道德上の品性を落し常に面に牆をする如き陰の人の如くなるべし。

斯の不斷なる正義の光なき家には、神の光なき處、不斷の定規なく豹變常なく進退節度なきに至らん。あゝ開なる哉。

四〇

不斷光裡の健闘

人世は吾人が菩薩の使命を果たすべき場裡なり。吾人が此世界には吾人を魔境に誘惑すべき機會列なり、自己の内心には偷安快樂を追求する煩惱潜伏し、吾人は優柔不斷の意志たらば速も此闘争に勝利の望なきが如し。然れども聖なる不斷光正義の光が自己の勇氣の物々と實現し來るが有りて始めて健闘す。如何なる場合にも節操の堅固なる義俠堅忍正義は是如來の正義が吾人の胸中に湧出せる觀念にして、口實を設けて遁辭を以て己が義務を遁れ責任を避けんとする如きは寔に是如來の聖徳を汚す無情漢にして自ら信者を以て自任しながら正義に背き節を變じ約を破りて愧るの色なき……

【以下斷絶】

會報

紀南光明會趣意書

人は何處から生れ來たのか？ 人は何がために生きて居るのか？ 人は死んで何處に往くのか？

是は人生の大問題で、何人も知らんと欲して、然も知り能はざる難問題である。

光明主義は、此の大問題に對して、最も明快なる解答を與ふるものである。

光明主義に依つて、吾等に内蘊せる靈性は開發せられ、富める人は富めるがままに、貧しき人は貧しきがままに、如何なる境遇にある人も、常に光明を仰ぎつつ、人間と生れ來りし喜びを、本當に感じ、眞に楽しく、眞に生々した人世を送る事が出来るのである。

光明主義は、一切の人々が等しく靈性を開發し、共に光明の裡にあつて、憎みや争ひ

のない、愛の世界即ち其生極樂を實現せんとするにある。生ける間は、眞に心の平和を得て、無上の幸福を感じ、老ゆるも悲しまず、病むも苦とならず、希望に輝く白道精進の生活を續け、死に際しては、またなき満足を感じて絶對安心の下に、大往生を遂げんとするにある。

二

光明主義は、近代の大宗敎家、佛陀禪那辨榮上人の首唱せられたものであつて、我國に於ける、眞の宗敎建設者たる、聖法然上人の眞精神を闡明し發揮せられたのである。光明主義が信奉する御敎は、法然上人が専ら信行したまひし『南無阿彌陀佛』である。南無阿彌陀佛とは、無量壽(永遠の生命)無量光(常恒の平和)に在ます。宇宙最尊の大靈なる、阿彌陀佛に歸命信賴して、ま心に人格の完成を希念する、最も力強い聖名である。であるから、南無阿彌陀佛は、從來普通一般に考へられてゐたやうな、縁起の悪い事でも、又死ぬためでもない。實に私共が光明生活に入る事の出来る根源であつて、人生の救済となり、生命となり、幸福となり、歡喜となり、暗黒を照らす大光明となるのである。お念佛は、過去を清め、現在を生かし、未來を完ふする大願業力である。南無阿彌陀佛は、必ず救はんと、やるせない如來の眞實心と、どうしても救はれたいとの切なる私共の眞實心との強い接觸であつて、そこに貴い靈化の威徳を蒙るのである。思ふに、信仰は、單なる議論でも、概念でも、又觀念でもない。眞劍な實修、實感、直感の世界である。體驗の世界である。限りなき、いのちと光(人格の完成)を求めてやまぬ方！ 堪えやらぬ、苦惱と憂愁に沈める方！ どうぞ、先づ來つて、光明主義の教ゆる所を聞き、そして眞劍に修養して下さい。必ずあなたの人生に、榮光は輝くであらう!!! あなたの幸福のため、否な家庭、國家、社會の福祉増進のために、是非御入會を御願ひいたします。

光明主義は、宗派の如何を問はず、老幼男女を論せず、萬人等しく生きるの眞實道でありますから、何人様も御入會を御勧めいたします。尙今現に國家社會の中堅たり、又將に其中堅たらんとする、青壯年(男女)諸氏の御來會を特に歡迎いたします。

三

本會は最も勝れたる、清き信仰の友の集でありますから、別に會則は設けません。本會の例會を、毎月各地に開きます。毎月例會の外に、特別修養會を開きます。會場は、例會の前日までに、御通知いたします。服装は、絶対に華美をさげ、質素清淨に願ひます。食事の場合は、その前後に、合掌十念して下さい。本會の會費は、要りませぬ。其他物質上の御援助は、一切御願ひ致しませぬ。

紀 南 光 明 會

大正十五年四月廿五日印刷
同 廿五日發行

誌代年七冊一圓二十錢(郵税共)
年十二冊二圓(郵税共)

編輯兼 山崎 辨 成
發行人

東京市小石川區若荷谷町九八
印刷人 小林 七 太郎

東京市小石川區水道端二ノ四四
發行所 ミオヤのひかり社
振替東京六六八五一番